

## 日本老年歯科医学会

# 認知症患者に対する義歯診療GLを公開へ

認知症患者の義歯治療には、衛生管理やコミュニケーションの問題など配慮すべき点が多い。日本老年歯科医学会(理事長=東京歯科大学老年歯科補綴学講座教授・櫻井薫氏)は5月23日、「認知症患者に対する義歯診療ガイドライン」(以下、診療GL)作成のための最終パネル会議を開催。良質な義歯診療が認知症患者のQOLを高め、認知症の予防にもつながる可能性があることを確認した。最終版は今年(2018年6月)中に公表予定。

## 医療者以外の意見を求める

同パネル会議の目的は、同学会が作成した診療GL案について義歯使用者や認知症患者の家族、介護士ら6人から意見を聴取し、最終版作成の資料にすること。同学会が診療GL

の作成に当たって医療者以外の意見を求めるのは、今回が初めて。

診療GL作成委員会委員長で徳島大学大学院医歯薬学研究部教授の市川哲雄氏は「認知症の重症度によっては、義歯を製作しても使用率は低いとの報告があり、痛みを適切に表現できないため義歯の調整ができないなどの問題もある。一方、重度の認知症患者で義歯を使用している例は少なくない。誤嚥のリスク、噛むことの利点などを勘案して義歯をつくらなければいけない」と解説。診療GLでは、義歯の使用が可能かどうかを判断する要因について、「義歯を使用する利点とリスクを考慮し総合的に判断する必要がある」と明記した。

認知症患者の家族の立場で発言したパネリストからは「地域の包括支援センターと連携し、ケアマネジャ

周知徹底を進めていきたい」と述べた。

同学会では学会会員に対し標榜科名の「脳神経内科」への変更を呼びかけており、来年の4月1日までは全ての神経内科が変更を完了できると想定しているという。同氏は「来年には専門医や国の統計についても、診療科名に“脳神経内科”が用い

一のサポートを受けて歯科治療が可能となるケースがあった」「家族としては義歯の使用が十分可能に見えるのに、歯科医から認知症があると義歯は無理と言われてしまう。義歯の使用、管理が可能かどうかを家族にも聞いた上で検討してほしい」などの意見が出された。

## 義歯装着は認知症予防に有用

認知症では、症状の進行とともに義歯の衛生状態が悪化する可能性がある。不衛生な義歯は口腔内微生物の温床となりやすく、齦歯や歯周病、義歯性口内炎、誤嚥性肺炎の発症につながるため、義歯の衛生管理は重要とされる。このため、診療GLでは「認知症患者における義歯の衛生管理は、必要に応じて本人から介護者に移行すべきである」と明記した。

この点について、認知症患者の介護に携わるパネリストからは「義歯を手で受け取れない家族が多い。家族が義歯の管理ができるとは限らない」などの意見が出された。

診療GLには、義歯の装着は認知症の予防に有用となる可能性も明記された。日本人高齢者4,425人を対象に4年間研究した結果、残存歯が

少ない上義歯を使用していない人は、認知症発症のリスクが20本以上歯が残っている人の1.9倍との報告もある。ただし、咀嚼などの口腔機能を維持できる良質な義歯が装着されていることが大前提となる。

パネリストからは「義歯を入れてから転倒が減った」「経口摂取できるようになり、表情が良くなった」「滑舌が良くなり、発語が増えた」などの事例が報告され、適切な義歯治療が認知症予防につながるという意見が多かった。一方、「認知症でも義歯をつくってくれる歯科医師が増えてほしい」「費用への不安から義歯を敬遠する高齢者も多い。保険制度や費用について知らせてほしい」など、歯科対応に関する課題も示された。

また、インプラントに関しては、治療前に認知症の有無を十分診査することを推奨し、認知症発症後あるいは認知症発症リスクが高い場合は、インプラント治療は慎重に考慮すべきであることが明記された。

市川氏は「患者や介護者の意見を聞いて、われわれが想定していたことが実際とは異なっていることも多かった。頂いた意見を基に最終の文面をまとめた」と述べた。

## 来年までに「脳神経内科」浸透を 日本神経学会

今年(2018年)3月に、学会としての標榜診療科名を「神経内科」から「脳神経内科」に変更すると発表した(4月5日号既報)日本神経学会は5月11日、記者会見を開き、代表理事で京都大学臨床神経学教授の高橋良

## でのひらサイズの吸入麻酔器、火星へ

式採用されたことを明らかにした。

Medical Tribuneの取材によると、この器具は宇宙だけでなく小規模病